

幼児用問題行動尺度（保育者評定版）の妥当性の検討

金山元春・中台佐喜子・前田健一

Validation of teacher-rated problem-behaviors scale for preschool children

Motoharu Kanayama, Sakiko Nakadai, and Kenichi Maeda

幼児用問題行動尺度（保育者評定版）の妥当性を検討するために幼児123名のデータを対象に問題行動尺度得点とソシオメトリック指名得点との関係について検討した。相関分析の結果は以下の通りであった。外在化問題行動得点と否定的指名得点に正の相関があった。内在化問題行動得点と肯定的指名得点に負の相関があった。外在化問題行動得点、内在化問題行動得点と好意性得点との間にはいずれも負の相関があった。外在化問題行動得点と影響性得点に正の相関があった。内在化問題行動得点と影響性得点に負の相関があった。以上の結果は、幼児用問題行動尺度（保育者評定版）の妥当性を示すものであった。

キーワード：幼児，問題行動尺度，保育者評定，妥当性

問題と目的

問題行動とは、発達上ないしは社会集団への適応上、問題となる行動（竹林，1999）と定義される。幼児の問題行動に関する研究の多くは、介入研究も含めて、保育所や幼稚園といった保育現場をフィールドに実施されてきた。保育所や幼稚園は、子どもが家庭を離れて同世代の仲間と過ごす集団生活の場であるので、保育現場で収集されるデータは、幼児の社会集団への適応上、問題となる行動を研究するのに必要不可欠の情報を提供してくれる。

保育現場をフィールドとした研究を充実させるためには、保育現場において幼児の問題行動を測定するための道具を開発する必要がある。なぜなら、幼児の問題行動に関する実証的研究を行ったり、問題行動を軽減するための効果的な介入法を開発、実施したりするには、問題行動の正確な測定が必要となるからである。

子どもの問題行動の測定法には、自己評定法、保育者評定法、仲間評定法、行動観察法等をあげることができる（McFadyen-Ketchum & Dodge, 1998）。このうち、自己評定法と保育者評定法には、実施が簡便で経済効率が高いという利点があり、多忙な保育現場において幼児の問題行動を測定するのに実用性の高い方法といえる。しかし、幼児を対象とした場合、言語能力や認知能力の限界から、自己評定法の実施は困難である。したがって、保育現場での実用性が最も高い方法は保育者評

定法であるといえる。保育現場をフィールドとした研究を充実させるためには、妥当性、信頼性を備えた保育者評定尺度の開発が求められる。

こうした要請に応えるために、金山・中台・磯部・岡村・佐藤・佐藤（2006）は、わが国の保育現場で幼児の問題行動を測定するための保育者評定尺度を開発した。彼らは、まず、わが国の保育現場で実際に観察される行動であることや保育者が実際に評定可能であることを重視した尺度項目を作成した。続いて、保育者100名にこの尺度項目への回答を求めて、3歳から6歳までの幼児1493名のデータを収集した。

その後、収集したデータを用いて因子分析を行い、外在化問題行動と内在化問題行動の2因子を抽出した。Achenbach & Edelbrock（1978）による分類以来、子どもの問題行動は、攻撃行動や多動に代表される externalizing な行動と引きこもりに代表される internalizing な行動の2側面に大別できることが知られており、尺度の因子的妥当性が認められた。

次に、彼らは外在化問題行動と内在化問題行動それぞれに含まれる項目から下位尺度を構成し、尺度の信頼性、妥当性について検討した。

尺度の信頼性については、内的整合性と安定性を検討した。まず、クロンバックの α 係数を算出し、外在化問題行動が $\alpha=.89$ 、内在化問題行動が $\alpha=.76$ との結果を得て尺度の内的整合性を確認した。さらに、2時点（1カ月間隔）にわたる尺度得点の相関係数を算出し、外在化問題行動が $r=.98$ 、内在化問題行動が $r=.96$ との結果を得て尺度の安定性を確認した。

また、尺度の妥当性について検討するために、外在化問題行動得点、内在化問題行動得点それぞれと自由遊び場面における行動観察によって測定された孤立傾向値との間の相関係数を算出した。問題行動を示す子どもは仲間集団から孤立しやすい（佐藤、1996；佐藤・佐藤・高山、1993）ので、外在化問題行動、内在化問題行動いずれの得点も孤立傾向値と正の相関が予測された。特に、内在化問題行動はその行動特徴からして外在化問題行動よりも強い相関が予測された。結果は、外在化問題行動が $r=.27$ 、内在化問題行動が $r=.40$ と予測通りであった。

以上のように、金山他（2006）が開発した幼児用問題行動尺度は、ある程度の信頼性と妥当性を備えているといえる。しかし、尺度の妥当性はただ1つの証拠によって検証されるものではなく、複数の証拠を積み上げていくことによって高められていくものである。そこで、本研究では金山他（2006）が開発した問題行動尺度の妥当性を高めるために、金山他（2006）の尺度によって測定された問題行動得点とソシオメトリック指名法によって測定された仲間からの評価との関係について検討する。

ソシオメトリック指名法では以下の手続きによって仲間からの評価が得点化される。まず、個別面接場面で、「一緒に遊びたい子」（肯定的指名）、「一緒に遊びたくない子」（否定的指名）といった選択基準にしたがって、何人かの仲間を指名するように幼児に求める。その後、個々の幼児について仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数を集計する。続いて、それぞれの合計数について、本人を除くクラスの仲間数で除算し、仲間1人当たりからの指名数を算出する。次に、これを対象児全体の平均値と標準偏差に基づいて標準得点に変換し、肯定的指名得点、否定的指名得点とする。また、この2つの得点から好意性得点（肯定的指名得点－否定的指名得点）と影響性得点（肯定的

指名得点+否定的指名得点)を算出する。肯定的指名得点は、仲間から積極的に好かれる程度を表し、否定的指名得点は、仲間から積極的に拒否される程度を表す。また、好意性得点は、好かれる程度と拒否される程度の差を表す。影響性得点は、好かれるか拒否されるかにかかわらず、得点が高いほど仲間への影響力が強く、無視できない存在であることを表す。

金山他(2006)の問題行動尺度が、社会集団への適応上、問題となる行動を測定しているのであれば、算出された問題行動得点とソシオメトリック指名得点との間に相関関係がみられるはずである。予測される結果は次の通りである。外在化問題行動を示す幼児は否定的指名を受けやすいと考えられるので、外在化問題行動得点と否定的指名得点には正の相関があるだろう。一方、内在化問題行動を示す幼児は積極的に否定的指名を受けることはないが、肯定的指名を受けにくいと考えられるので、内在化問題行動得点と肯定的指名得点には負の相関があるだろう。以上のような関係から、外在化問題行動得点、内在化問題行動得点と好意性得点の間にはいずれも負の相関があると考えられる。また、外在化問題行動を示す幼児が、否定的指名とはいえ、積極的に指名されやすいのであれば、外在化問題行動得点と影響性得点には正の相関が予測される。一方、内在化問題行動を示す幼児が、肯定、否定は問わず、指名を受けにくいのであれば、内在化問題行動得点と影響性得点には負の相関が予測される。

方法

参加者

埼玉県の子稚園2ヶ所に在籍する幼児123名(年中男児26名、年中女児30名、年長男児31名、年長女児36名)と保育者6名が参加した。

測度

幼児用問題行動尺度(保育者評定版) 金山他(2006)が開発した幼児用問題行動尺度(保育者評定版)を使用した。

表1 幼児用問題行動尺度(保育者評定版)の項目

外在化問題行動

人や物に攻撃的である
他の子どもがしている遊びや活動のじゃまをする
そわそわしたり、落ち着きがない(多動である)
注意散漫である
不注意である

他の子どもと口論する
きまりや指示を守らない
かんしゃく持ちである

内在化問題行動

他の子どもたちと一緒にいるとき不安そうである
さびしそうにしている
悲しそうであったり、ふさぎこんだりする
仲間との遊びに参加しない
ひとり遊びをする

表1の項目を用いて、担任する幼児の普段の様子について「まったくみられなかったら=1」「少しみられたら=2」「ときどきみられたら=3」「よくみられたら=4」「非常によくみられたら=5」の5段階で保育者に評定を求めた。その後、外在化問題行動、内在化問題行動に含まれる項目の得点をそれぞれ加算し、外在化問題行動得点と内在化問題行動得点を算出した。

ソシオメトリック指名法 幼稚園の一室に個別面接場面を用意し、「一緒に遊びたい子」（肯定的指名）、「一緒に遊びたくない子」（否定的指名）といった選択基準にしたがって、クラスの仲間を指名するように幼児に求めた。指名数の制限は設けなかった。その後、個々の幼児について仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数を集計した。続いて、それぞれの合計数について、本人を除くクラスの仲間数で除算し、仲間1人当たりからの指名数を算出した。次に、これを対象児全体の平均値と標準偏差に基づいて標準得点に変換し、肯定的指名得点、否定的指名得点とした。また、この2つの得点から好意性得点（肯定的指名得点－否定的指名得点）と影響性得点（肯定的指名得点＋否定的指名得点）を算出した。

なお、否定的指名の実施は、実施後の仲間関係に否定的影響を与えると懸念されてきた。現在のところ、否定的指名の実施が子どもの仲間関係に有害であることを実証した研究証拠はみられない（前田，2001）。むしろ、2つの研究（Bell-Dolan, Foster, & Sikora, 1989 ; Hayvren & Hymel, 1984）は、否定的指名の実施が、実施後の仲間関係に有害な影響を与えないことを報告している。しかし、前田（2001）は、否定的指名の実施に際しては倫理的・道徳的問題に配慮し、可能な限りの注意を払って慎重に実施する必要があると指摘している。本研究でも、前田（2001）にしたがって可能な限りの配慮を行った。また、実施後、担任保育者に幼児の様子について聞き取りを行った。その結果、否定的影響は報告されなかった。

結果と考察

問題行動尺度得点とソシオメトリック指名得点との相関係数を算出した。表2に結果を示した。

表2 問題行動尺度得点とソシオメトリック指名得点との相関係数

	肯定的指名	否定的指名	好意性	影響性
外在化問題行動	-.06	.30 ***	-.26 ***	.17 †
内在化問題行動	-.25 **	.02	-.19 *	-.16 †

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

外在化問題行動得点と否定的指名得点に $r = .30$ ($p < .001$) と有意な正の相関があった。これは、外在化問題行動を示す幼児は否定的指名を受けやすいとした予測通りの結果であった。

内在化問題行動得点と肯定的指名得点に $r = -.25$ ($p < .01$) と有意な負の相関があった。これは、内在化問題行動を示す幼児は肯定的指名を受けにくいとした予測通りの結果であった。

また、外在化問題行動得点と好意性得点には $r = -.26$ ($p < .001$)、内在化問題行動得点と好意性得点には $r = -.19$ ($p < .05$) といずれにも有意な負の相関があり、予測通りの結果となった。

さらに、相関係数は小さいながら、外在化問題行動得点と影響性得点に $r = .17$ ($p < .10$) と正の相

関が、内在化問題行動得点と影響性得点に $r = -.16$ ($p < .10$) と負の相関があった。これも予測通りの結果であった。

金山他 (2006) が開発した幼児用問題行動尺度 (保育者評定版) によって測定、算出された幼児の問題行動得点と、幼児の社会集団における適応状態を反映するソシオメトリック指名得点との間には予測通りの関係があった。よって、金山他 (2006) の尺度は、社会集団への適応上、問題となる行動、すなわち問題行動を測定する尺度として妥当性があるといえる。

上述したように、尺度の妥当性は複数の証拠を積み上げていくことによって高められていくものである。金山他 (2006) の尺度の妥当性については、今後も研究証拠を積み上げていく必要があるだろう。特に、金山他 (2006) の尺度が、発達上、問題となる行動を測定する尺度として妥当性があることを示すためには、縦断的研究による証拠が必要と考えられる。今後の課題としたい。

引用文献

- Achenbach, T., & Edelbrock, C. 1978 The classification of child psychopathology: A review and analysis of empirical efforts. *Psychological Bulletin*, **85**, 1275-1301.
- Bell-Dolan, D. J., Foster, S. L., & Sikora, D. M. 1989 Effects of sociometric testing on children's behavior and loneliness in school. *Developmental Psychology*, **25**, 306-311.
- Harvren, M., & Hymel, S. 1984 Ethical issues in sociometric testing: Impact of sociometric measures on interaction behavior. *Developmental Psychology*, **20**, 844-849.
- 金山元春・中台佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子 2006 幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発 パーソナリティ研究, **14**, 235-237.
- 前田健一 2001 子どもの仲間関係における社会的地位の持続性 北大路書房
- McFadyen-Ketchum, S. A., & Dodge, K. A. 1998 Problems in social relationships. In E. J. Mash & R. A. Barkley (Eds.), *Treatment of childhood disorders, 2nd ed.* New York: The Guilford Press. pp.338-365.
- 佐藤正二 1996 子どもの社会的スキル訓練 行動科学, **34**(2), 11-22.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練—コーチング法の使用と訓練の般化性— 行動療法研究, **19**, 13-27.
- 竹林奈奈 1999 問題行動 氏原 寛・小川捷之・近藤邦夫・鏑幹一郎・東山紘久・村山正治・山中康裕 (編) カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房 p.612.

付 記

本研究に参加くださいました幼稚園の教職員、園児、関係者の皆様に感謝申し上げます。また、本研究にご協力くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。